

チェルノブイリの子どもたち



チェルノブイリ子ども基金 NEWS No. 97 2014年6月21日発行
郵便振替口座 「チェルノブイリ子ども基金」 00160-4-98316

チェルノブイリ 28 周年救援キャンペーン

「チェルノブイリと福島」

4/12-4/16 写真展 (文京シビック展示室)

4/24 講演会 広河隆一 ☆ シネオカヤ・インナ
(文京シビック小ホール)



<写真展来場者の感想>

◆表面的に 2011 年 3 月前の生活を取り戻したかに見えるけれど、いつも心のどこかで恐怖を感じながら暮らしている状態です。目を背けたくなるけど、絶対そうしてはならないと強く感じました。(40 代女性)

◆遠い国ではなく身近な国として、どこか自分たちの近い未来を歩いているチェルノブイリの人々の姿にとっても複雑な想いを抱く写真群でした。今後とも心に留めていきたいと思います。(40 代男性)

◆今も現在進行形として続くチェルノブイリと福島の問題を常に問題提起していると思う。多くの人々に見てもらいたいと思う。(50 代女性)

写真展 (4/12~4/16) は 5 日間で 802 名の来場者がありました。講演会 (4/24) は、定員を超える 385 名にご来場いただき、会場に入りきれないお客様は控室のモニターでご覧いただかなければならないほどでした。ご来場いただいたみなさま、まことにありがとうございます。写真展の設営・撤収や開催中の受付にのべ 60 人、また講演会当日の受付・物販・案内などに 35 人のボランティアの方々にご協力いただきました。このようなボランティアの皆さんのおかげで、両イベントを無事に終了することができました。ほんとうにありがとうございます。チェルノブイリと福島の子供たちに、今後ともあたたかいご支援をいただけますよう、よろしくお願い申し上げます。



“チェルノブイリ被害者家族のための保養”

5/10~5/21 ベラルーシ「希望」(本文 12-13 頁)

「原発事故の被災者として、母として生きる」 シネオカヤ・インナ（ウクライナ）

こんにちは。私はインナといいます。ウクライナのキエフからまいりました。原子力の危険性という問題に関心をお持ちの、多くのみなさんに、こうしてお目にかかることができるとてもうれしく思います。残念ながら、このようなイベントは毎年少なくなっています。人々はチェルノブイリの事故を忘れつつあります。特に政治家や役人といった人たちは、そうでしょう。でも、被害にあった人達は決して忘れることはありません。

広河さんとこのイベントの主催者のみなさんにお礼を申し上げます。まさにこのような出会いにより、私たちはお互いの経験を分かち合い、恐ろしい原子力の危険について人々に思い出してもらうことができるのです。

多くの人たちが、事故はだいぶ前に起きたことだから、今はもう切羽詰った問題ではないと思っています。でも、最も恐ろしいことは、28年が過ぎてさえ、その影響は続いている、ということなのです。ウクライナでは今でも大勢の人たちが甲状腺がんを病んでいるのです。毎日のように、子どもも大人も手術を受けています。何度か手術を受けなければならない人や、抗がん剤による化学療法を受ける人も多くいます。大勢の人たちが毎日薬を飲まなければなりませんし、自分の命を守るために病氣と闘わなければなりません。

<チェルノブイリ事故

当時のこと>

チェルノブイリ原発事故が起きたとき、私は4歳でした。妹のヴィーカはもうすぐ3歳の誕生日が目前でした。当時、事故についての報道は何もなく、人々はおだやかに通りを散歩していました。私たちもその日、他の子どもたちと同じように外で遊び、放射能の塵を吸い込んでしまいました。事故のことを知った時にはすでに手遅れでした。放射性ヨウ素は甲状腺に入り込み、甲状腺を破壊し始めていたのです。も



し、最初の日にはキエフから避難していれば、今も病氣にはなっていなかったかもしれません。でも、事故のことを知らされた時には、バスも列車もみな乗り切れないほどの満員状態になっていて、町から避難するのは困難でした。それでも放射能がその後の人生を台無しにしてしまうかもしれない、という真実を知っていたなら、人々はたとえ歩いてでも町から避難していただろうと、私は思います。事故の処理作業に携わった人々は健康を損ない、若くして命を落としました。国家からの補償が約束されていたのに、それを受けとる間もなく亡くなった人も多くいます。

<甲状腺がんと診断されて>



私は、13歳の時、甲状腺がんと診断されました。それまで私は普通に生活していて、病氣はしていませんでした。ただ、少し苛立ちやすく、疲れやすく、それから、頻繁に鼻血が出たり、頭痛が起きたりしました。そして、喉のところに違和感のようなものがありました。でもこの症状が、甲状腺の病氣と関係があるとは誰も思いませんでした。たまたまある人が、私の喉に、ちょうど鶏の卵くらいの大きさの膨らみを見つけ、病院に行ったほうがよいと、忠告してくれました。私は病院で検査を受けました。そして手術をすることが決まりました。母はひどくショックを受けました。医師の部屋から出てきた母が、どんなに泣いていたか、私は覚えています。手で顔を覆い隠し、壁に手をついて体を支えるように、むせび泣いていました。母の髪の毛は、1週間で白くなりました。寝ることも食べることもなく、ただ祈り、泣いていました。母は精神的にだけではなく、金銭的にもとても困難でした。一人で二人の子どもを育てていました。手術にも治療にもお金が必要だったのです。母は知り合いや親せきにお金を借りたり、家財道具を売ったりして、お金を工面しました。私は、母が心臓発作でも起こしてしまうのではないかと心配でした。私は初め、自分に何が起こっ

たのかわかりませんでした。手術は痛くて、命に危険があるため、とても恐ろしかったです。

手術の後、私の首には大きな赤い傷跡が残りました。私にとってこれが一番嫌なことでした。私の手術では甲状腺全部と、副甲状腺も切除されました。副甲状腺は、体のカルシウム濃度を調節する器官です。さらに手術の時、声帯が傷つけられました。そのため私は長いあいだ声を出して話をする事ができませんでした。

手術のあと、今度は、放射線照射による治療が決められました。手術の後、頻繁に足の異常な痙攣、体のだるさ、めまい、心臓の痛み、頭痛が起こるようになりました。もう、もとのような生活は永久に戻らない、ということを理解しました。ほかの人たちのようにはもうなれないと。毎日薬を飲む日々が始まりました。この薬なしでは生きていくことができないのです。首に残った無残な傷跡をいつも隠していなければならないことが、心を重くしました。でも、なにより、私は障がい者になったのだ、ということが心を重くしました。このことが一番辛かったのです。

チロキシンという名の甲状腺ホルモン剤とカルシウム剤、これを毎日飲むことに、慣れる必要がありました。子どもの頃はよく飲むのを忘れました。チロキシンの量は、常に管理しなければなりません。2年に一度、調べます。もし多く飲みすぎると、心臓が痛くなります。もし少ないと、体がだるくなり、気力がなくなり、何もすることができなくなります。これらの医薬品は、子どもの頃は無料で処方されていました。でももう何年もの間、無料の処方はされておらず、すべて自分でお金を払って買わなければなりません。

<保養に参加して>

1994年、病院の医師のすすめにより、ウクライナのチェルノブイリ被災者のための救援団体の会員になりました。アンナ・コズロワさんという人が代表をしていました。当時広河さんが代表を務めていた日本のチェルノブイリ子ども基金は、こ



の団体を支援していました。チェルノブイリ子ども基金は、ウクライナの子どもたちが、ベラルーシのサナトリウム「希望」で保養をする企画をしました。そこで、私は日本についてたくさんを知り、日本の文化に触れ、日本人の先生やボランティアの人たちと交流することができました。環境汚染のないきれいな地区で過ごし、きれいな空気を吸い、放射能のない食べ物を食べるということは、たとえ一時的であっても、子どもたちにはとても重要なことです。子どもたちの体にとっ

ても、心にとっても、サナトリウムでの保養は大変よい影響を与えました。私たちはここでは、ほんとうに楽しくて、興味深いことがたくさんあって、1ヶ月間ずっと、病気のことなど忘れて、健康な普通の人間なんだと感じて過ごした

のです。多くの新しい友だちもできて、そのうちの何人かとは、今でもつきあいが続いています。(上の写真は、当時「希望」で子ども基金が開催した、ウクライナとベラルーシの甲状腺手術後の子どもの保養プロジェクトの様子。撮影：広河隆一)

チェルノブイリ子ども基金、広河さん、そしてご寄付をくださったすべてのみなさんにお礼を申し上げます。あなたがただけが、私たちを理解し、私たちの痛みを感じることができたのです。こんなにも遠い国の人々が、ウクライナの子どもたちを助けてくれたことに、私は驚きました。でも、このような核の悲劇について、みなさまが誰より一番よくご存知なのだと、わかりました。日本の皆さまは善良で、思いやりがあり、心の豊かな方々なのだと、感じました。

<病気になってからの生活>

病気になってから、学校をたくさん休まなければなりませんでした。毎年、入院していました。学校では、この病気の子どもは私一人だけでした。授業に遅れてしまい、勉強についていくのが大変でした。私のことを気にかけて助けてくれる先生もいました。母が私にとって一番の心の支えでした。私は学校を無事に卒業しました。その後、大

学の社会学部で学び、卒業後は子ども郊外教育センターの教師として、また社会活動関連の専門家として働きました。

見た目には、私は普通の健康な人間にみえます。誰も私が子どもの頃からの障がい者とは思いません。でも実際、私は免疫力がとても低く、常に健康に問題を抱えています。たとえば去年私は7度、副鼻腔炎にかかりました。そのたびに、抗生物質を2〜3週間飲むという治療が続きます。このような健康状態で働くのは難しいことです。頭痛、心臓の痛みが頻繁に起こり、とても疲れやすいのです。カルシウム不足のため、背中や体中の関節が痛みます。甲状腺と一緒に、副甲状腺もとってしまったため、カルシウムの代謝ができなくなりました。

治療を受けているときや、毎年検査を受ける中で、また保養をしたサナトリウムでも、私と同じ病気の子どもたちと知り合いになりました。彼らはみな体の弱さや免疫力の弱さを訴えています。残念ですが、何度か手術を受けて、化学療法を受けた友だちの中には、すでに命を落としてしまった人もいます。また他の友達も、次々と現れる病気の症状と必死になって戦い続けています。甲状腺というのは、とても重要な体の器官です。それがないと、体全体の働きが狂ってしまいます。ホルモン剤は完全にその代わりとはなれないのです。

<出産の決意>

私のような人は子どもを持つてはいけない、と医者たちは言っています。でも5年前、私は子どもを持つことを決心しました。妊娠中、(腫瘍マーカーの)カルシトニンの数値が急激に上がりました。これは、ガンの再発を示しています。カルシトニンの値が上がるということは、体のどこかに新たながん細胞と転移があるということです。このホルモンの正常値は0〜9ですが、私は750でした。医師は、カルシトニン値がこんなに高い患者は今までいたことがなく、どんなことがあっても妊娠を続けてはいけな

いと言いました。緊急に検査をして、これらの新たながん細胞をみつけなければならないと言われました。でも妊婦にはそのような検査をしてはいけないので、私はすぐに中絶をしなければなりませんでした。もしそうしなければ、体中に転移が広がり私の命はなくなります、と言われました。とてもショックを受けました。しかし、誰よりもショックを受けたのは母でした。母はそれこそキエフ中のお医者さんに私を連れて行きました。医師はみな、中絶を勧めました。そうでなければあなたは娘さんを失いますよ、と言われたのです。流産してしまうだろうとか、無事に出産することは難しいと言われました。甲状腺の病気がある女性が出産するのは難しいのです。あるいはがんの転移でそれまでに命がもたないとか、カルシウムが溶けて骨がダメになってしまうとか、病院では色んな恐ろしいことを聞かされました。

妊娠中に流産の危険が2度あり、3週間ずつ入院しました。カルシトニン値が毎月高くなり、1500まで上がりました。内分泌研究所、ガン研究所、産科学研究所の医師たち、小児科医たち、彼らは私のことについて話し合いをしました。彼らは言いました。このようにカルシトニン値の高い

患者は、今までいなかった。これはガンであることに間違いはなく、あなたを救うことはできません。妊婦であるあなたにはどんな薬も治療もできないのですから、と。私はとてもショックを受けました。でもすべての検査を拒否しました。もちろんそれは大きなリスクでした。でも、たとえ自分の命を失うことになっても、自分で子どもの

命を消すことはしない、と決心したのです。私はいつも、がんで死ぬかもしれない、と怖がることに疲れました。ほかの人たちと同じように、家庭を作り、母親になりたい、と強く思いました。子供の頃から、神様と心の導くままに生きていかなければならない、と学んで生きてきました。夫の支えがあったことが救いでした。彼は私の決断を正しいこととして信じてくれました。



医師が私の診断を知ると、彼らは私を他の妊婦のように診ることをいやがりました。助産所は私の受け入れをいやがりました。すべての責任は自分がとります、という書類をかかせられました。7ヶ月で人工出産をすることをすすめられました。早く私を検査したかったからです。このような神経の張りつめた状態で私は9ヶ月過ごしました。そのときの気持ちを言葉にあらわすのは簡単ではありません。母はひどい状態でやっと生きている感じでした。常にストレス状態にあり、毎日、私が明日もちゃんと目を覚ますことができるのかと、心配して過ごしていました。

私は自分の子どもをこの目で見たいと強く思いました。もし私に何かあったら、子どもは母親なしで生きていかなければならない、どんなに子どもを愛しているか、言ってあげることもできなくなる、私はこのことを何よりも恐れていました。そこで、自分の将来産まれてくる子どもに手紙を書く事にしました。子どもに、少しでも母親からの思い出として残るようにと。どんなに強くあなたを愛しているか、どんなにあなたを待ちわびているか、と書きました。そしてもし何かあっても、私の心はいつでもあなたのそばにある、と。私はたくさん子どもに言いたいことがありました。そしてその手紙を書き終わる前に、私は、生き延びて、この言葉を直接子どもに言いたいと、強く思ったのです。

<娘マリアンナの誕生>

9ヶ月後、素晴らしく健康な女の子、マリアンナが生まれました。私は、帝王切開の手術の後、数ヶ月は体調が悪く、意識を失うこともあ



りました。でも、出産後、すぐにガンの検査には行きませんでした。その検査や、新たな照射治療、あるいは化学療法のせいで、母乳が出なくなことを恐れていたからです。さらに8ヶ月間、母乳を与えました。私はただただ、赤ちゃんのそばにいたかったのです。長いあいだ望んだ、そしてみ

んなが生んではいけないといった、私の子どものそばに。その後、MRI検査と放射性同位元素を用いる検査（シンチスキャナー）受けました。幸いにも、何も見つかりませんでした。以前と同じように、再発の可能性は残っています。でも、がん細胞はまだとても小さくて、検査では見えないくらいのようなのです。危険はありましたが、子どもを産めたことはとてもうれしいです。娘は私にとって一番の幸せ、生きる支えです。



マリアンナはもう5歳です。とても陽気で、人付き合いの好きな女の子です。お絵かきが好きで、歌や踊りが上手です。甘いものが大好きで、夏になったら海に行きたいと夢見ています。私は何をおいても自分の健康に気を

つけています。なぜなら、それは今、自分にとってだけ大事なことでないからです。私が健康でなくなったら、子どもの面倒をちゃんとみることができなくなってしまうのですから。人の体の持つ可能性は、完全には解明されていないと、私は考えます。どんな医師でもわからないことはまだあるのだと思います。

人々に与えられる試練というものは、それぞれの人の力に合わせて与えられるものだ、と聖書に書いてあります。難しすぎたり、手に負えないような試練は、神様は与えないものだ。つまりそれは、人はそれぞれ自分の試練をのりこえることができる、ということです。そのときに、正しい選択をすることが大事なのです。

<子どもたちの未来のために>

日本のみなさんも、地震、津波、洪水など、大きな試練を受けています。福島悲劇に関して、ウクライナ人はみな深い同情の気持ちを抱いています。日本の原発事故のことを知ったとき、私たちはみなさんをとて心配しました。世界中が不安をもって、みなさんが原子力事故の影響からどのように守るのか、みつめています。日本は最先

端に行く技術国として知られています。その日本の皆さんであればこそ、そうした原発事故と向き合うすべを編み出すことが出来るはずです。

汚染された地区に住む皆さんには、たとえ1年に1度、ある一定の期間でも、汚染のないところで過ごすことは大切です。特に子どもを保養に連れていくことはとても重要です。それぞれみなさんには事情があることは承知していますが、それでも将来、病気などにかかる可能性を少しでも減らすために、今子どもたちを汚染のないところに、できるだけ連れていくようにしてほしいと思います。

皆さんのご家族のどなたかなどが、将来何か病気にかかってしまった時、それは放射能と関係がないと言われるでしょう。でも、必ず、かつて被曝したという悲しい記憶がよみがえります。その時、あの時あれをしておけば、こんなことにはならなかったかもしれない、という思いに駆られるのです。ですから、自分は最善を尽くしたと思えるように、今できることは全力で全てやっておかねばなりません。

原子力の事故は、一生、どこまでも容赦なくついてまわるのです。放射能は土壤に染み込み、植物に移っていきます。放射能で汚染された土地には何十年にもわたり何も植えてはならないのです。できるだけ早く遠くに離れてください。もし家族全員が離れることが無理であれば、子どもたちだけでも、せめて年に1度、数週間でも、環境のきれいなところで過ごさせてあげてください。

日本でも、すでに甲状腺の病気の子どもがいることを知っています。病気になってしまったお子さんを持つ両親のみなさんも、どうか絶望しないでください、闘ってください。放射能の影響については、医者にとっても分からないことだらけなのです。言われるがままにならず、自分自身で行動し、調べて、最も適した治療法を見つけ出して下さい。



子どもたちに言いたいことは、困難な中でも祈り強い意志を持ってほしいということです。何かをしたい、何かになりたいという強い意志をどうか持ってください。夢を持ってください！ 信念と、強い意志があれば、それは必ず病気を直して

くれると私は信じています。たとえガンであってもそれに打ち勝ち、幸せな人生を過ごせるのです。

私は、原子力発電所を使ってはならない、と考えます。チェルノブイリのような爆発がもう一度起きたらどうなるのでしょうか。残念ながら、みなさんご存知のように、原子力の事故が起きたら、元に戻すことは不可能です。その被害は地球規模のものとなり、地域が破壊され、

何万という人々が故郷を追われ、健康や、命でさえ失うのです。

私たちのおじいさん、おばあさんたちは、放射能や化学物質に汚染されていないきれいな土地を、遺伝子組み換えでない作物を、私たちに残してくれました。近代科学の発展は、少数の独占的な資本家の富にのみ貢献しています。彼らはたった1世紀のあいだに、人が住む地球を危険なものにしてしまったのです。私たちはどんな土地を孫たちに残すのでしょうか。



日本の人々が、最も安全なエネルギー源を探し出し、美しい自然と人々の健康を守っていくことを、私は信じています。私たちはみな協力して、次の世代のためにこの地球を残すために、できるすべてのことをしていかなければなりません。

講演会終了後ロビーにて。
妹のヴィーカさん（左） インナさん（右）

インナの母 リティヤさんからのメッセージ

チェルノブイリ原発事故の当時から、私たちはキエフに住んでいました。事故の起きる直前の 1986 年 4 月 23 日に、インナは扁桃腺の手術を受けました。5 月 1 日、人々はメーデーのデモ行進に参加していました。私と子どもたちは、公園へ散歩に出かけました。春たけなわで、あたりは緑に覆われていました。スープに入れようと思い、イラクサの若葉を摘んで集めました。そのとき、葉っぱが灰色の埃をかぶっていることに気付きました。でも、それが危険なものだとも思わず、洗って、そのまま煮込みました。もしかしたら、妹のヴィーカは、まだ小さかったので、そのスープは口にできなかったかもしれません。その頃、町では強い風が吹いていました。くるくると渦を巻くような風でした。埃や砂があたり一面に飛び交い、私たちはそれを吸いこみました。子どもたちは外に出て、公園で砂遊びをしていました。事故についての情報、その恐ろしい影響についての情報は、長い間隠されていました。仕事もあって、私たちがキエフから別の町に避難したのは事故から一か月後、一か月間だけでした。どのように自分を守ったらよいのか、どのような予防法があるのかについて、マスコミも何も知らせてはくれませんでした。当時はインターネットなどありませんでしたので、人々はどのようにしてよいのか、自分や、子どもたちをどのように守ったらよいのか知らず、病気の兆候もわからず、健康に影響があることなど、想像することもできなかったのです。

甲状腺の手術を受ける前から、インナは体が弱く、よく風邪をひき、頻繁に鼻血を出していました。それから、歯がもろくなっていました。それで、病院に行くことが多かったのですが、しかしどの医師も、内分泌の専門医を受診しなさいとは言いませんでした。たまたまある人が、インナを内分泌の専門家に連れて行ったほうがよいと忠告してくれて、甲状腺の検査を受けたところ、すぐに手術が必要だとわかり、甲状腺を全部切除しました。どうしてインナは病気になり、妹のヴィーカは病気になっていないのかは、わかりません。もしかしたら、その時ちょうどインナは免疫が下がっていて、そのために放射能の影響をより強く受けてしまったのかもしれませんが。あるいはインナは砂場で遊ぶのが好きで、ヴィーカはそうではなかった、ということも関係あるかもしれません。当時の、そんないろいろな小さな出来事が、その後の人生に大きな影響を与えてしまったのかもしれませんが。今となっては、はっきりとしたことは言えません。インナの手術後、ヴィーカも検

査を受けました。彼女は甲状腺が肥大していて、甲状腺機能障害と診断されました。でもその時医師はこう言いました。「これは、チェルノブイリ事故が起きた後のウクライナでは、普通です」と。

国に対しては特別な要求をしたことはありません。ただインナが国から障害者年金をもらうため、病気がチェルノブイリ事故と関連があることを示す証明書を得るだけで、何年もかかりました。今インナは、一月 100 ドルの年金を受けていて、市内の公共交通が無料です。さらに、毎年でないにしても、2 年に一度、21 日間のサナトリウムでの保養を申し込むことができます。しかし、チェルノブイリの被災者への補償は年々少なくなって、まもなくそれは全くなくなってしまいうでしょう。甲状腺の手術後、今度は 1 ヶ月間の放射線照射による治療が始まりました。しかし、治療の 2 週間目で、インナは肌に血の気が全くなり、まるで白い画用紙のような顔色になりました。くちびるも白くて、ほんの 1 点のピンク色が残っていただけでした。とても体が弱っていて、頻繁に失神しました。心配になった私は自分でインナを検査室へ連れ出し、必要と思う検査を、自分で頼んでお金を払って受けさせました。インナが弱り切って真っ青になったとき、白血球の値が極端に下がっていました。私は治療を続けることを拒み、自分の責任で病院から退院させました。まだ半分しか治療が終わっていないくて、癌の転移があるかもしれませんよ、と医師たちは言いました。ウクライナでは医師たちは、甲状腺の治療の次のように提案しています。最初に手術、次に放射線照射治療、抗がん剤治療、または放射性ヨウ素を使った治療です。インナの場合は、甲状腺髄様がんであり、甲状腺がんの中でもまれなタイプでした。このタイプの患者の放射性ヨウ素はとても高額です。1 回に 1,500 ドルです。私には、これは治療ではなく、人の命を縮めるために、放射能をさらに加えているとしか思えませんでした。それほど見るに堪えない治療でした。

それからさらに年月が過ぎ、今から 6 年ほど前にインナは結婚して、妊娠しました。インナが妊娠していると知ったとき、もちろん私は喜びました。でもそれは私たちにとって大きな試練となりました。病気の再発の恐れがあることを知ると、医者たちはみな、中絶して、再び照射治療を受けるようにと言いました。相談さえも拒まれ、病院での妊婦としての登録も拒まれ、中絶するように言われていました。しかし、彼女の、子どもを産みたいという気持ちは、

とても強かったのです。私は、心配で丸1か月以上、殆ど眠れず、殆ど食べ物も喉を通りませんでした。でも娘を助けるためにこれではダメだと思い直して、食べるようにしました。そして私は民間療法の本をたくさん読み、試してみました。インナにある民間療法を始めさせると、腫瘍マーカーのカルシトニンの値が半分に減りました。このおかげで無事に出産できたのかもしれませんが。神様に私たちの祈りが通じたのか、やっとこの世にインナの娘、つまり私の孫のマリアンナが誕生しました。

最近では、多くの病気が明らかに若年化しています。以前だったら、病人の多くは年配の人たちでしたが、今は若い世代に多く見られます。そして、若い人たちは、私たちの世代が若かった時に比べて、とても体が弱くなっています。彼らは骨や関節の問題に、より悩まされています。全住民、とくに子どもたちへの、国のレベルでの医学的検査を毎年行うことが、必ず必要だと思います。残念ながら、ウクライナでは、子どもに対して全国レベルでの甲状腺の必須検査という体制がありません。



原子力、それは人間にとって毒であり、それに對する解毒剤は、残念ながらみつかっていません。放射能は周りの環境から、汚染された食べ物などから体に入り込み、蓄積されていきます。たくさん放射能をためてしまった人は、病気になり、早く命を落とします。人々に安全の補償がないまま、どうして原子力発電所をつくることができるのでしょうか。癌の治療も、放射能による病気の治療もまだ見つからないというのに。現代医学のすすめる「治療」というのは、必ずしも人々が望むような結果はもたらさず、それでいて、高額な治療費がかかります。たとえ平和目的であっても、原子力を使ってはならないと、私は確信しています。ウクライナはたくさん原発を造り、ヨーロッパにきれいな電気を売っています。一方で、私たちには放射能、病気、放射能のゴミによって汚染された土地が残っています。原発で働く人々は、病気になったり、命を落とすかもしれないという危険の中で働いていて、一方で、他の人々はこれによって安易に電力を得ている。こんなことがあってよいのでしょうか。放射能汚染の影響によって失われる命、人間の生活の価値について、誰も考えていなかったのです。あるいは、多く

の人々が、病気になって、治療のために高額な費用を支払わなければならないとは、誰も言いませんでした。そして、生まれたばかりの赤ん坊にまで、すでに深刻な原子力の負担を背負わせ、死ぬまでその不安を持ち続けなければならない、このような子どもの命の大切さについて、誰も考えなかったのです。この世界で一番大切なのは、人間であるということ、特に子どもたちであるということ、人々に理解してほしいと強く願います。未来の世代にどのような地球を残すのか、私たちの祖先が残してくれたようなきれいな地球を残すのか、あるいは、何百年も何も植えることもできない、有害で汚染された地球を残すのか、私たちは考える必要があります。みなさん、どうか自分たちを守ってください。自分

たちの豊かで美しい大地を守ってください。みなさんは知恵のある人々です。科学のあらゆる分野で、未来への新しい道を大きく切り拓くことが出来るはずだと思います。

みなさんが原子力の問題について正しい選択をしてくれると信じています。どうか自分たちを、そして将来の世代を守ってください。どうかお願いします。

リディヤ・アレクサンドロヴナ・コヴァリ

(p.2~8 翻訳：佐々木真理)

<講演会来場者の感想>

■ウクライナで廃村となった村と、現在の三春町がほぼ同じ線量ということに衝撃を受けました。インナさんが医師の反対にめげずに、自分を信じて見事に母親になられたことに非常に胸を打たれました。(30代 女性)

■インナさんの「原子力の事故は一生、どこまでも追いかけてくる」という言葉は印象深かった。今できることを最大限、行動に移すべき事を強く感じた。広河さんの数値のデータ比較は、多くの人へ知らせなければと感じた。(60代 女性)

■自分と同年代のインナさんの体験を聞いて胸が苦しかった。3.11を経て我々日本人がすることは、先人たちの経験からできることを全力ですることなのだったと思った。(30代 女性)

■インナさんの「普通に子どもを産み、安全に暮らしたい」という言葉は、福島で原発事故が生じてから、多くの日本人の願いにもなっていると思います。広河先生の「チェルノブイリに学ばない日本人」という怒りの声は、考えさせられました。(50代 男性)

→ p.14へ続く

講演 広河隆一「チェルノブイリと福島」(前編)

久しぶりにチェルノブイリの取材をしました。この前に行ったのが2011年の2月から3月初めにかけてでしたが、帰ってきてから10日間ほどで地震と原発事故が起きました。それ以来、日本を離れられなくて、ずっと行けませんでした。

今年は福島にとっては3年目です。僕が初めて、隠されていたチェルノブイリの被災地に入ったのが、チェルノブイリの事故から3年目でした。だから、チェルノブイリの3年目で見たことと、福島の3年目で見ていること、それをどうしても見たいと思いました。

いつも放射能測定器を持って行くのですが、チェルノブイリで使っていた測定器、これは何十回と使っていたものですが、それが福島原発の双葉町に入ったときには振り切れてしまうという、それまでに経験したことがないことが起こりました。これはいったいなんなのか、どういったらよいかわからず、自分でもとまどっていました。

今回は、最近福島で使っている測定器を持って行きました。放射能の問題というのは、機械に頼るしかありません。広瀬隆さんなど、人間の身体がもっとも優秀な放射能測定器だという言い方をしていますが、それが現れるのはもう少し後です。現れた頃にはもう遅かったりします。今年測った結果を見ていただきながら、どう判断したらいいのか、一緒に考えたいと思います。

.....*.....*.....*

3月から行き、4月の最初に戻ってきました。「DAYS JAPAN」の取材も兼ねていましたが、たとえそれが取材として形にならなくても、いまこの時期に見ておかななくてはいけないことがあるので見ておきたかった。そして、私の取材風景を映画に撮っている人たちが、同行しました。

【原発の4号炉】

これはチェルノブイリ原発の4号炉です。見慣れた風景ですが、ここに壁ができてきています。それから煙突が少し短くなっている感じがしました。今回3号炉の側をはじめて見てびっくりしたのは、3号炉も石棺に覆われていたということで



す。両方とも覆われて、さらに遮蔽の工事が進んでいる。同じように、内部も工事が進んでいる、そういう状況だと思います。

今回持って行ったホットスポットファインダー。核種、種類が出てきます。そして、測った値が出てきます。非常に精巧な機器です。(※測定地図を示しながらの説明部分はここでは省いています。当基金のホームページに掲載している動画、または「DAYS JAPAN」6月号「実測・チェルノブイリ放射能汚染地図／福島の人が住む町と比較」を参照してください。)

チェルノブイリの30キロ圏で測りました。ベラルーシでも測りましたが、今日は主にウクライナの話します。0.23 μ Sv/h 以上は一般人の放射線管理区域。それ以上では住んではいけないところ。年間1mSv以上で放射能管理区域、18歳未満は立ち入り禁止のところです。

年間20mSvまで大丈夫というのが日本の政府の考え方で、1時間あたりに直すと3.8 μ Sv/h となる。そういうところでは、学校や施設を使っても構わないというのが日本の方針です。そしてその数値に基づいて、人々の帰還が可能になる。

これがチェルノブイリ30キロ圏。そこから17キロ離れたところにチェルノブイリ市があります。ここで宿をとって、いろいろな道を行きました。車の外と内側(1.5倍をかける)を測りました。10キロ圏に入る検問を通るとどんどん数字が上がり、原発に行きます。原発から少し離れたところにプリピャチ市、ノボシベリチ、トルストイレ、そういったところを取材しました。

.....*.....*.....*

ベラルーシの国境近くです。このあたりが、事故から3年後に初めて入ったところで、まったくの立ち入り禁止で秘密地域でした。そこに最初に入った村があります。人々が住んでいて、動物の異変などが報告されたところでした。

そしてここがナロジチ市。町は3分の1くらいに人口が減っていました。途中でポレスコエという町があって、10年前はそこに泊まったこともあり、かつては「安全」と言われて人々も生活していましたが、今回行ったら、まったくの廃墟になっていました。結局は安全なんかではなかった。町を捨てざるを得なかった。

【ドームと原子炉】

チェルノブイリ原発です。端っこに4号炉、3、2、1と並んでいます。現在建設中のドーム。3年前に測ったときよりも、はるかに低い数値になっていました。1時間あたり、 $2.7\mu\text{Sv/h}$ 、 $2.5\mu\text{Sv/h}$ で、 $2\sim 3\mu\text{Sv/h}$ の値です。

原発から数百メートルのところ、そこが2とか3。この値は、福島県では人が住んでいるところです。このことをどう考えたらいいのか。判断に苦しみました。



原発のドームです。ここまで完成している。3年前まではまったく姿が見えなかったのですが。少し離れたところに「プリピャチ」という看板がある。放射能のマークがそばにあったりします。ここも高いけど、800メートルくらい下ったところの土手で測ったら、どんどん放射能の値が上がる、そんな状況でした。

プリピャチの町の入り口からは、原発が見えるのですが、ここはかつて林でした。事故の後、放

射能で松が真っ赤になって、全部切り倒されて、土の中に埋められた。それが28年たって、またこういうふうにも木が生い茂っています。

福島市の数値とプリピャチ市の数値を比べてみました。2013年です。現在廃墟になっている町の現在の値と福島県の去年の値。ほとんど変わらない。そういう数値の現れ方をしています。

10キロ圏内です。ノヴォシュペリチ村の映画館。壁に、28年前のものがそのまま貼ってありました。内部は、椅子が少し残っていて、屋根が崩れ落ちています。5年か10年の間に、全部崩れてしまうのではないかと思います。

2013年の伊達市の数値とノヴォシュペリチ村の値。伊達市だと $1\mu\text{Sv/h}$ とか $1\mu\text{Sv/h}$ 以上は少ないのですが、でも現れ方はよく似ています。そういうような場所です。



【廃墟・学校】

途中の廃墟トルストイレスの学校、ガスマスクが散乱している。トルストイレスの町は、 $0.7\mu\text{Sv/h}$ とかで、場所によっては $3.8\mu\text{Sv/h}$ とか $4\mu\text{Sv/h}$ に近いところがある。

そこからさらに入ったところで、現在、ほとんど家が焼け落ちているところがあります。ステチャンカ村といいます。なぜここが記憶に残っているかというと、このステチャンカ村から避難したアレクサンドラという子がいます。甲状腺がんの手術をした彼女を支援しました。事故の後、絶望した村人が全ての家に放火して、焼け落ちてしまいました。

ステチャンカ村の汚染は、 $1\mu\text{Sv/h}$ とか、多くても $1.5\mu\text{Sv/h}$ 位の所ばかりです。

片や日本ではそこに人が住んでいる、そしてもう一方では廃墟となり、人々は住んではいけないことになっている。もちろんそこにはセシウムだけでなくストロンチウムやプルトニウムなども落ちているわけです。日本のほうではストロンチウムやプルトニウムなどは測っていませんので、それは理由になりません。

【ナロジチ】

ナロジチというところで、子どもが赤ちゃんをあやしていました。ここに住んでいます。ここは3分の2の人たちが町を離れているけど、まだ住んでいる人もいます。たまに人々が通る、そんなところですよ。

フリスチノフカという町。（当時）一般の人々も立ち入り禁止になっていました。そのときに私が初めて入って、測定したら針が振り切れた。人々が不安のまっただ中にあった時期です。政府が何かを隠しているということは、彼らは気づいていたんですね。そんなときに村に入って測り、その測った数字を紙に書いて村の人に渡しました。渡さなきゃ村を出さないと言われたのです。その後、定期的に訪ねるようになりました。現在は90%ぐらいが廃村になっています。人々はいない。でも、まったく廃村になったあとで、家も空いているし畑もあるしということで、また住み込む人々もいます。

フリスチノフカと田村市の三春町。現れる数値が似た数字です。今年の1月に測った三春の数字です。0.09 μ Sv/hとか0.13 μ Sv/hになっていますが、ここは0.15 μ Sv/h、0.17 μ Sv/h、10年前にはここに泊まったりして、まだ町が生きていましたが、今回行ったら廃墟になっていました。やっぱりだめだったと。後になって分かったというのは許しがたい、子どもたちにとって。

.....*.....*.....*.....

【ベラルーシの保養施設「希望21」】

子どもたちはこのままではいけない、保養させなくてはならないと、1991年にベラルーシで法律ができ、工事が始まったのがここ、「希望21」です。まだ出来上がる前にペトリャエフ教授に会いました。その頃私は「チェルノブ

イリ子ども基金」の代表をしていました。「ドイツとベラルーシの合弁でやろうとしているけどもとても追いつかないので、施設を作るのに協力してほしい」と言われ、関わるようになりました。この場所も測りましたが、数値はとても低い。0.06 μ Sv/h、0.07 μ Sv/h、東京で事故前に観測されていた数値です。そういう場所を彼らは選んで、保養センターを作りました。

【健康診断】



到着するとすぐに、子どもたちは健康診断を受けることになっています。いま、沖縄の久米島に「球美の里」という施設を運営していて、今月までに、保養した人の数が1000人を突破しました。「希望21」はこれまでに6万人を超えています。空気のよいところで汚染のないものを食べさせる、それから情操教育によって、子どもたちの中に生きる気持ちや免疫を上げることを望む、そういったことを目的にスタートしましたが、途中から、もう一つの新しい意義が加わりました。それは、「サナトリウム」という言い方もしますが、子どもたちに対する医療機関として充実したものにしていくということです。【次号に続く】（文責：向井雪子）

★講演会の録画は、子ども基金のホームページ(下記)でご覧いただけます。

http://homepage2.nifty.com/chernobyl_children/2014-kouen.html

DVDをご希望の方は事務局へお問い合わせください。

★講演会の記事は、東京新聞、社会新報に掲載され、NHK World(海外向け英語放送)では講演会の様子とインサさんのインタビューが放映されました。

2014 年 5 月 ベラルーシ チェルノブイリ被害者家族の保養

子ども健康回復センター「希望 21」

ベラルーシ ミンスク州 ビレイカ地区

期間：5-10～5/21 参加者：8 家族 18 人（子ども 8 人：3～11 歳、大人 10 人：28～36 歳）

「チェルノブイリ被害者家族の保養」は、今年で 7 年目。参加した母親 8 人は、子どもの頃甲状腺の



手術を受けた人たちです。6 人の母親は、子ども基金が「希望」で開催した“甲状腺手術後の子どものための保養”に参加しました。手術後は皆、ホルモン剤の服用と定期検査が欠かせません。参加者のほぼ全員が慢性胃腸炎です。「これは、長い間ホルモン剤を飲み続けていることと関係があると思います。かといって、甲状腺をとってしまった彼女たちは、ホルモン剤を飲まないわけにはいかないのです」センターの医師オリガは話します。また 4 人の母親は、頭痛と疲労感を訴えています。3 人は、手足など関節の痛みを訴えています。

母親たちは、日本の原発事故後の状況をととても心配しています。女性として、母親として、子どもの将来を心配する気持ちがよくわかる、と言います。参加者の一人クリク・イリーナ（29 歳）は、甲状腺手術の際、声帯が傷つけられ、今もかすれ声でしか話せません。



「日本の女性たちへ伝えたいことは、自分と子どもの健康に注意を払うこと、そして諦めないこと。子どもは人生の宝です。この子のために私は生き続けます。」参加した子どもたちは全体として免疫力が低く、中には深刻な病気の子どものもいます。生まれつき心臓に異常のある子どもや、背骨に問題がある子どももいます。

滞在中は、マッサージ、水圧療法、塩治療、歯

科治療、薬草療法、アロマテラピー等を受けました。また、子ども用の教室（絵画、陶芸、手芸など）、大人用の教室（子どもの健康・衛生・心理面に関するセンタースタッフによる授業）が行われました。子どもたちの遊びスペースとして、おもちゃなどの遊具がある部屋が当てられ、親たちが治療を受けている間などは、センターのカウンセラーが子どもたちと一緒に過ごしました。天気の良い時には周辺の森や湖に自転車で出かけたがり、施設内の遊具で遊んだりして過ごしました。参加者同士はみな仲良くなり、大きい子は小さい子どもたちの面倒をみたり、一緒に遊んだりしていました。親同士も交流を深めました。

ミハイロワ・イリーナ（28 歳）

娘クリスティーナ（10 歳）

ゴメリ市

私は美容師の仕事をしています。心筋症と、背骨の痛みがあり、病気がちです。娘は染色体異常で、生まれつき子宮がありません。先天性心臓病で、片方の足のむくみがひどく、専用の靴が必要です。学校で体育の授業は参加できません。甲状腺にも問題があります。最近では難聴もみつき、手術を受けました。この保養に招待してくれた日本のみなさまのご健康をお祈りします。そして深くお礼を申し上げます。



ポクロフスカヤ・オリガ（35 歳） 娘ダリヤ（6 歳） 娘アレクサンドラ（3 歳） ミンスク州モレヴィチ市（オリガは汚染地区からの避難民）

「希望」での保養に初めて参加。生涯忘れ

られない素晴らしい思い出となりました。職員のあたたかくきめ細かい対応、子ども用の遊具の充実度、高レベルの治療、栄養のあるおいしい食事。何もかも素晴らしかったです。うちの収入では、親子でこのような保養はとてもできません。本当

にありがとうございます。将来を心配している日本のみなさん、ご自身と、お子さんの健康に十分気をつけてください。私には愛する子どもたちがいます。この子たちのいない人生は、想像できません。どうか恐れず、将来はよくなると信じてください。

ディルコ・オリガ (28歳) 娘ポリーナ (3歳)
ミンスク市

娘には健康上の大きな問題はありませんが、よく風邪をひきます。私は頻繁に頭痛が起き、大変疲れやすいです。走ったり、長時間歩いたりすることができません。強い日差しを浴びると具合が悪くなります。頻脈があり、高血圧症です。私は子どものころから「希望」で何度も保養をしました。その度に友人との再会や新たな出会いがあります。「希望」は私にとって第二の故郷です。素晴らしい保養に招待してくれた日本の皆さんに感謝します。



ブルシ地区 (イリーナは汚染地区からの避難民)

私は頭痛が頻繁に起こり、疲れやすく、足の関節の痛みがあります。乳腺の手術を2度受けています。何かストレスがあると、髪の毛がたくさん抜け落ちます。娘は視力が急激に低下しています。よく急性気管支炎にかかります。息子はよく風邪をひきます。心臓に問題があるため、年1度検査を受けています。「希望」での保養はすべてに満足しました。私と、私の家族にこのような保養の機会をくださり、本当にありがとうございます。病気になってしまった日本の子どもたちへ伝えたいことは、前向きな気持ちと、我慢強さをもって将来を考えてほしい、ということです。



2014年救援カレンダー表紙の母子は、家族で保養に参加。



キルバイ・イリーナ (30歳)
息子イワン (3歳)
レチツァ市

私は郵便局で働いています。疲れやすく、頻繁に風邪をひきます。手足の関節の痛みもあります。子どもは喉や鼻が弱く、頻繁に風邪をひきます。月に一度は二人とも体調を崩しています。「希望」では温浴療法、マッサージなどの治療を受けました。私にも子どもにも、保養のための素晴らしい設備です。できれば再び訪れたいです。大きなあたたかい心を持った日本の人々に感謝します。みなさんのご援助を決して忘れません。



食事風景

「希望」教育部門長で、家族保養の責任者であったT・ヴェーラ。「ベラルーシでは腫瘍病の子どもを受け入れているサナトリウムは他にありません。今回の参加者の中には、十代の頃に、子ども基金の保養プロジェクトに参加した人たちもいます。そして今、大人になった彼らを、家族とともに保養に招待しています。甲状腺の病気の子どもを、このように長く支援するプロジェクトを行っているのも、ベラルーシではこのサナトリウムだけです。これは大変貴重で素晴らしいことだと思います。」
(報告：佐々木真理)

ボンダレンコ・イリーナ (30歳) 娘クリスチーナ (11歳) 息子エゴール (6歳) ゴメリ州ドー

＜講演会来場者の感想＞ p. 8からの続き

■甲状腺ガンを患った子どもや女性がどんな苦しみを感じていたのか、どんな治療を受けたのか初めて知りました。今後子どもを産む私たちも、不安を感じながら生活しなければならないことが辛いです。若い人たちが事実を知ることが大切だと思います。(20代女性) ■私はインナさんとはほぼ同じ年齢です。彼女が生きてきた30年と私の30年を重ね合わせ、彼女がどんな思いで生きてきたのかを想像し、涙がこみ上げてきました。そしてこれから生まれるかもしれない我が子の30年後、私たちの未来とインナさんの今を重ね、胸がしめつけられました。これから日本に生まれてくる子どもたちは永遠に清浄な大地というものを知ることなく生きていくのだろうか？危険と言われ続け生きる子どもたちが「自然の優しさ」を知ったり、それを守ろうと思う心は育つのだろうか？そんな子どもたちが将来どうこの地球で生きてくのだろうか？と想像する時、本当に原発の罪深さを感じます。(30代女性) ■写真をまじえながらチェルノブイリの被害と状況について詳しく知ることができました。“大丈夫”と言われて住んだ村が、後に廃墟となっていたという事例があまりにも多いことに驚きを隠せません。危機感を持たなくては！と強く感じました。(20代女性) ■私達にこれから何が起きるのかを、チェルノブイリの人々が身をもって教えてくれている。私達はチェルノブイリの人々から真剣に学ばねばならない。私達はチェルノブイリの人々であり、チェルノブイリの人々は私たち自身になったのだから！(50代女性) ■“不都合隠し”のためにオリンピック、原発再稼働および輸出等、いろいろなことが行われようとしている現実、正直激しい憤りを禁じ得ない。一人一人がよく自覚し、身を守るための賢い知恵、生きる術を身

につけていくべきではなかろうか。(50代男性)

＜写真展来場者の感想＞◆「原子力がなくては電力量が足りない」「原子力を無くすなんてキレイごとだ」という意見が、どれだけ愚かであるのか・・・そう思いながら展示を見ました。(10代女性) ◆わが国ではこんなに怖いものをまだやるのか。足が震える。原発ゼロです。(60代女性) ◆悲しいです。もうこれ以上不安を増やさないで欲しい。原発でないエネルギーを。私たちのエゴをなくして次の世代に地球を守り渡さないと(50代) ◆チェルノブイリ事故から28年経ち、今でも多くの人々が苦しんでいることに驚きました。福島事故もこれからいろいろな事が起きなければならないと思いました。(60代男性) ◆母の実家は福島で親戚も福島で現在暮らしています。原発ではない方法でエネルギーを作り出し安全な生活が送れるようにみんなで取り組んでいきたい。日本だけでなく世界の平和や幸せを地球のみんなで考え行動していくべきであると思いました。(30代女性) ◆チェルノブイリで被害を受けた人々のその後の写真がとても印象に残りました。福島の原発の延長線上にある、と思わざるを得ませんでした。私も福島の出身で、震災当時も福島にいたのですが、当時は「チェルノブイリ＝福島＝危険」という図式が許せませんでした。ですがこの展示を見てチェルノブイリ自体のイメージが少し前向きなものへ変わりました。震災から月日がたった今だからこそ、この展示を見られてよかったです。(10代女性) ◆沖縄での子どもたちの姿が、この写真展の中で、しばしですがほっといたしました。いつ果てるともない不安と苦しみ、決して原発を許してはいけないと思います。(70代女性) ◆原子力は人類がコントロールできないエネルギーである以上、廃していくべきである。惨状は写真でよくわかった。(60代男性)



募金・救援状況



●募金状況 2014年3月～5月 (単位:円)

	3月	4月	5月
募金件数	179件	161件	50件
救援寄付金	571,634	554,647	217,957
保養費	72,000	193,500	15,300
特別保養費	70,000	140,000	35,000
里子支援	182,540	11,600	34,800
ニュース購読費	68,000	50,000	6,000
イベント賛同金	103,000	62,000	7,000
合計	1,067,174	1,011,747	316,057

☆ほかに現物寄付として図書カード 500 円分

●救援状況 2014年3月～5月 (単位:円)

<ウクライナ>

◎子どもたちの生存

特別保養費 1,238,520

運営費(スタッフ給料、通信費、家賃) 443,803

<ベラルーシ>

◎希望 21

チェルノブイリ被害者家族の保養費 590,323

◎困難の中の子どもたちへ希望を

運営費(車修理代、スタッフ給料一年分) 440,598

子ども保養の交通費、家族保養の交通費 229,294

里子支援 1 人(14 年 4～9 月分) 31,179

緊急支援 1 人 9,999

◎チェルノブイリのサイン

運営費(スタッフ給料 2014 年分) 24,943

医薬品代 51,995

里子支援 5 人(14 年 4～9 月分、1～6 月分) 155,895

<ウクライナの政情と子どもたちの保養について>

★キエフの救援団体から、「昨年まで行っていたクリミアでの保養は別の場所で行う。国の状況は大変なことになっているが、子どもの保養は大切。ぜひ実現させる」と連絡がありました。(ウクライナでは汚染地域の子どもの保養は国の法律で決められていますが、必ずしも全員の子どもが、適した時期に良い環境の保養所に行っているわけではありません。)

★昨年夏、「原発を問う民衆裁判」の参加者の一人として来日、亡くなった息子ミーシャの話をしたワレンチンさんは、ドネツク市の近くの町に住んでいます。「町は比較的平穏で仕事にも通っているが、周りで起きていることから、心は穏やかではありません。ドネツクの空港は機能しておらず、いつ再開するか誰にもわかりません。新しい大統領がウクライナ東部の問題について解決してくれることを願います。人々の血が流されることのないよう、平和を強く願います。日本のみなさんはいかがお過ごしですか。福島はどうなっていますか」(2014.6.9 付メール)

♡募金団体名一覧♡(順不同・敬称略)

紙面の都合上、個人名は省略させていただいております。ご寄付をいただいたみなさまに心より感謝申し上げます。

【3月】トランスフェリックマネジメント／広河隆一非核・平和写真展開催を支援する会／カトリック徳田教会／(株)ジョイメイト／東京平和運動センター／ひろしま音楽鑑賞協会【4月】トランスフェリックマネジメント／東京一般労働組合 東京音楽大学分会／横浜長老教会／(株)ジョイメイト／小池音楽教室／東京一般労働組 東京音大分会／びお亭／(株)海洋工学研究所【5月】トランスフェリックマネジメント／(株)ジョイメイト

チェルノブイリ 28 周年救援キャンペーン 「チェルノブイリと福島」写真展／講演会

多くの方にご来場、ご協力いただきましたことを心よりお礼申し上げます。

♡チェルノブイリの子どもへの支援 78,398 円

♡福島の子どもへの支援 78,398 円
(未来の福島こども基金を通して活用されます。)

チェルノブイリ28周年救援キャンペーン 収支報告			
収入		支出	
入場料	351,000	講演会	
賛同金	291,596	会場費	34,000
会場募金	166,047	舞台費	20,000
物販益	51,160	ゲスト招聘費	251,854
		写真展	
		会場費	57,700
		パネル利用料・送料	132,900
		共通経費	
		印刷費	53,666
		発送費	107,592
		事務費	11,780
		交通費	33,515
小計	859,803	小計	703,007
		募金	156,796
合計	859,803	合計	859,803

～各地のチェルノブイリ 28 周年イベント～

◆「チェルノブイリ&福島」写真・絵画展 3/24～30
(埼玉県・富士見市)主催:ふじみーる／「チェルノブイリ&福島」写真・絵画展実行委員会 ○広河隆一さん撮影の写真と、チェルノブイリの子どもたちが描いた絵画が展示されました。多くの来場者がありました。

◆「チェルノブイリ・福島 いのちは宝」4/26(三重県・津市)主催:みえ426の会 ○インナさんの講演の他、内田ボブさん、ラニヤップさんのコンサート、久居高校演劇部の朗読劇、三重大医学生による展示が行われました。イベントの様子は Ustream ご覧いただけます。
(<http://iwj.co.jp/wj/open/archives/137172>)

※三重の講演会の記事は中日新聞(三重版)に掲載、NHK 名古屋の夜のニュースで放映されました。

事務局から

■ボランティア募集

◎ニュース発送作業(年4回:3・6・9・12月)

次回 9/20(土)午後1時～4時頃まで

場所:東京ボランティア・市民活動センター

(飯田橋駅ビル セントラルプラザ 10 階)

※日程が変更になる場合もありますので、ボランティア参加希望の方は、前日までにご連絡ください。

【問い】平日午前10時～午後5時 留守の場合は伝言をお願いします。T&F 03-5228-2680

◎事務局での平日・土曜日のボランティア作業は不定期に行っています。前もってお問い合わせください。

■「基金ニュース」について

募金をくださった方には、使途の報告としてニュースレターをお送りしています。また、ニュースレター購読費(2,000円/年)も募っております。印刷・発送などの経費の残金は、募金として使わせていただきます。

~~~~~  
★国際環境 NGO FoE Japan の招きにより、4/13-20、ドイツとベラルーシから、チェルノブイリ支援や環境・エネルギー問題に携わる市民12名が来日。広島・東京・福島を訪問し、講演や日本の市民と交流をしました。4/19には、文京シビック展示室で行われていた子ども基金主催の写真展を見学。来日したベラルーシ人メンバーの中には、「希望」で保養をしたことのある、20代の青年もいました。彼は汚染地域の村の出身で、現在はドイツの大学で学んでいます。「“希望”は天国のように素晴らしいところでした。保養をした後、明らかに自分は元気になったと感じました。保養をした子どもを代表して、日本の方々の支援に心からお礼を申し上げます」と話しました。やはり汚染地域の村出身の50代の女性は、廃墟の村の写真を見ながら涙を流しました。「当時私は妊娠していました。何も情報がなく、転々と避難させられました。子どもを産むことはできませんでした。故郷の村は今も誰も住むことができませんが、決して忘れることはできません」と話しました。  
~~~~~

※「黒部ドクターのお話」「福島だより」は、紙面の関係で、今号はお休みします。

＜里親募集＞

B・ウラディスラフ(12歳) ベラルーシ ゴメリ市

2008年2月、右臀部の骨軟部腫瘍の摘出手術を受けた。その後の検査で新たな腫瘍が見つかり、2012年に化学療法を受けた。現在も定期検査を続けている。

＊里親制度について詳しい資料をご希望の方は事務局までご連絡ください。



~~~~~  
★2012年4月に講演のため来日したオリガさん。息子のニコライ君(2013年8月生まれ)はすくすく育っています。オリガさんはとても幸せそうでした。(2014年5月、ゴメリ市の自宅にて)

いつもあたたかいご支援をありがとうございます。振込用紙と領収証につきまして、みなさまにお知らせとお願いです。

### すべての方に振込用紙を同封しております

事務作業の都合により、まことに勝手ながらすべての方に郵便払込用紙をお送りしております。決して募金を強要するものではありません。また、すでに通信費・寄付金を納入された方はどうぞご容赦ください。

払込取扱票のお名前・ご住所は楷書でご記入ください  
郵便局からは払込取扱票のコピーが届きます。文字がかすれて判読しづらい場合がございますので、楷書でわかりやすくご記入ください。

### 「受領確認の葉書」をご希望の方へ

通信費・寄付金を納入された方で、受領確認の連絡をご希望の方には、葉書(金額は記載せず)をお送りします。振込用紙の該当欄に印をつけてください。

### 「領収証」が必要な方へ

郵便局払込取扱票の「払込受領証」は公に認められる領収証です。大切に保管ください。別途領収書をご入り用の際はお申し出ください。

## ●チェルノブイリ子ども基金 NEWS 年4回発行●

〒162-0816 東京都新宿区白銀町25 メゾンド原207号室 Tel/Fax 03-5228-2680

ウェブサイト = [http://homepage2.nifty.com/chernobyl\\_children/index.html](http://homepage2.nifty.com/chernobyl_children/index.html)

E-mail: [chernobyl1986@tokyo.email.ne.jp](mailto:chernobyl1986@tokyo.email.ne.jp)

事務局ブログ ◇神楽坂事務局だより <http://blog.goo.ne.jp/chernobyl1986jimukyoku/>

※当基金は任意団体のため、ご寄付は税金控除の対象とはなりません。ご了承ください。